■向井　孝

共同体概論ノート

■内容目次・はじめに（A・社会主義神話の崩壊、B・現状況としてある〈共同体〉、C・〈家〉と〈共同体〉
闘争共同体（1・〈闘争〉〈組織〉〈自己〉、2・今日における共同体の意味、3・〈論理の不在と流行、4・闘争共同体の意味、5・非暴力直接行動）

はじめに

■A　社会主義神話の崩壊

①　ながいあいだ社会主義は、人々の正義であり希望であった。「資本主義から人類を解きはなち、個人の自由と幸福を保証する共産社会を実現する」という主張は人々の心をとらえ、ひたむきな運動をつくり出した。

だが、二十世紀に入って――とくにハンガリア革命以降のさまざまな現代史的事件は、社会主義もまた組織そのものが持つ強制的、抑圧的な性格を、まぬがれえぬことを露呈するものであった。国家として立ちあらわれるかぎり、社会主義も、その国家性において資本主義とかわりないということを。

②　また一方、私たちが何よりも切実に当面している――それゆえに現代をゆるがしているきわめて革命的な――課題に対して、社会主義はほとんど何の解決をも、もたらすものでないことが、しだいに明らかになってきた。

すなわち第一に、ベトナム戦争などを契機にしてひろがっている――世界的な反戦運動。

第二に、A・A諸国、アメリカ黒人など、日本で言えば朝鮮人、アイヌ人、部落や釜ヶ崎などにあらわれた、人種・民族・歴史・経済的な差別と疎外の問題。

第三に、資本と国家の癒着による、人間のみならず、自然からも収奪搾取しつづけた結果としての、環境破壊・公害極限化の問題。

このさしせまった――個人と地球全体の生か死かを問う問題に対して、社会主義はいまのいま有効な力となりえないのみか、ときには現体制維持の役割にまわる、ということすらでてきている。

③　このようにして、社会主義の栄光と威信は地に堕ちた。

とともにまた、その神話を支えていた一枚岩の団結や、前衛党信仰、窮乏化論とプロレタリアートの革命本隊説さえゆらぎ出してきた。

そして人々は、大きな幻滅のなかで、たとえ社会主義が社会を変えたとしても、おのれの人生が変らぬことに気付いたのである。

■B　現状況としてある〈共同体〉

④　二十世紀の歴史は、巨大な国家・その官僚機構と手を組んだ資本制によって、〈繁栄と進歩〉という、〈組織社会〉の進行をつくり出した。

人間はうまれおちるや、幾十の組織集団に属し、生涯をただ組織との重層的関係で生きる以外にない。

しかもその組織社会の進歩繁栄とは、微々たる一個人の悲喜を灰色の壁に塗りこんで、結果として、人間疎外と全体死への行進をつくりだしている。

この事実は、未来に託す希望であった社会主義神話の崩壊とともに、多くの人々を〈組織への絶望〉不信へとみちびいた。

⑤　それはまた、当然、人々を心情的な〈自己回帰〉――いわば〈私化状況〉をも生み出すものであった。

だが〈自己回帰〉というとき、まず第一に自分は、実は個人としてでなく、〈家の次元での存在〉であることにつきあたらざるをえない。

組織社会での闘争に疲れた若者たちが、その身をよこたえるところとして辿りつく処は、〈自己〉ではなく、自己と容易に切り離ちがたく、つねに自己そのものの形をとってあらわれてくる〈家〉であった。

⑥　〈国家〉は家によって、個人を把握している。家は〈家族〉として個人をからめとり、〈家庭〉として国家に対応する。

もともと家が歴史的な社会の基盤としての存在である以上、個人の抑圧そのものとして私たちの前に立ちはだかるのは当然である。

こうして、自己回帰は個へ還ることなく、自分を家に没入させるか、あるいは真の自己を求めての〈家出〉するか、いずれかをえらぶことを意味するものとなる。

⑦　だが〈家出〉したとしても、彼にとっていぜんとして家はのこっている。

家を否定し、捨てたとしても、解体せぬかぎり、彼のうしろに家は存在している。そして彼が、〈永遠に家出の旅〉をつづけるのでないかぎり、かならずふたたび家の問題は彼をとらえるのである。

一方、〈社会化の進行〉は、〈反文明〉〈脱社会〉〈放浪〉などの風潮を生んだ。また組織への絶望は、〈人間性の復権〉や〈新しい人間関係〉を求める声となった。そしてその一部は、〈共同体〉や〈アナキズム〉への志向とむすびついた。

それは、マルクス主義が害悪とかユートピアの名で切りすてたものに、M・ブーバーが新たな照明をあて〈もうひとつの社会主義〉として共同体やアナキズムを提示したものでもあり、失われた未来の希望をよみがえらせるものとして、若者たちの実践にむすびついた。

⑧　〈共同体〉にしろ〈アナキズム〉にしろ〈自由連合〉と呼ぶにしろ、それらの共通する特徴は、何よりも人間を原基において考える思想である。

人間を類的存在とし、社会的本質存在としてとらえるマルクス主義的社会主義に対してそれらは、日々の社会生活のなかにあらわれる一箇の人間の〈生〉を、その胸の襞々にかくされた小さな悲喜のおもいのひとつひとつを、何よりも至上のものとして取り扱うものである。

一言で言うならば〈あたらしい人間関係づくり〉の思想であり、人間関係のあり方そのものの思想といえるであろう。

■C 〈家〉と〈共同体〉

⑨ 〈人間関係〉というとき――マルクスが「人間対人間の直接的自然的必然的関係は、男性対女性の関係である」というように――それは、第一に〈男と女の関係〉である。

それゆえ、そこでは〈性〉が――つまり男と女の関係が――どうつくられるか。さらに言えば〈性の解放〉が、したがって〈女の解放〉がどう進められるか、がまず出てこなければならない。

そして〈家〉とは人間の個体が性として、つまり男または女として現われざるをえない場所〉であることにおいて、それは〈家〉の問題であり、〈家の解放〉と深く関連していることが明らかとなる。

⑩ 共同体の問題は、このような現代的状況と密着した視点からのみ語るとき、はじめて歴史的課題を真に背負うこととなるだろう。それは、かならず〈国家論〉→革命論〉たらざるをえない一面とともに、ただちに〈家論〉→〈男と女の〉性愛論〉として、すなわち人間の内と外との両極にわたる〈全的革命〉の問題として、きわめて多面的に、いまあらわれていると言わねばならない。

闘争共同体

■1 〈闘争〉〈組織〉〈自己〉

⑪ 今からふりかえると、六九年十・十一月のいわゆる「決戦」とよばれた時期を境として、学生・新左翼を中心とする反体制闘争は大きく転回した。

そして、その結果としての大きな挫折は、運動の沈滞と萎靡、そして展望喪失による脱落の状況をもたらした。

⑫ 一きょにすべてを、そして〈闘争〉を見失った彼らは、何ものこっていない地平をみまわして、いまはただ〈自分〉ひとりという〈場〉に回帰していく以外になかった。そして、昨日まで自分をかりたてたもの――組織――と遠ざかるにつけ、それへの絶望は、いよいよ彼を自己閉鎖に追いやるものであった。

⑬ しかも、つねに〈組織〉に依拠し、他人によってうごかされてきた彼にとっての自己への回帰とは、かつて住んだことのない故郷への里がえりにひとしいものであった。

回帰の〈場〉となるべき自己実体の不在――つまり、〈自分〉がないということであった。

「自分として、何をするのか」何の答えももっていないということであった。

⑭ 〈自分への回帰〉は、本来〈主体としての個の自立〉という正当な方向への足どりである。

しかもこの場合、すべてを失い、追いつめられての逃亡は、〈回帰すべき自己とは何か〉をあきらかにしえないまま、組織不信を裏がえして、ただ自己を情念化するだけである。

そのような情念だけの思考は、自慰的などうどうめぐりのあげく、自己を被害者にするだけで、どのような出口をも見出せない。

このようにして多くの人々は、外部との関係を切断し、自己内部へ閉塞した心情を屈折させるだけであった。

結果、一時の激情はしだいに燃えつきて、そのまま外的状況への無関心派となるか。自慰的な頽廃の日々に耽溺しつつ、自棄的享楽派と化すか。すべてを見てしまった老人のごとく、皮肉でニヒルな傍観者となるか……総くずれの様相でながれはじめたのだった。

⑮ ひるがえって、この十・十一月決戦の〈挫折〉は、政治的な時間を対象としていたということにおいて、〈政治的挫折〉であり、〈政治的敗北〉ということであろう。しかも〈政治的敗北〉は、つねに日常私たちが受けている一般現象ではなかったか。

〈革命〉とは、そのように外的な政治経済的社会の変革を時限的にめざすものであるとともに、内的な――人間個々の自由とか幸福――自分の生活意識の変革をも意味するものである。

⑯ とすれば〈自分への回帰〉とは、外的変革と同時にすすめられねばならぬ内的変革――自己の内なるもの――への闘いでなければならないだろう。

それは組織によって消されていた自己の回復であると同時に、自覚者としての自己、すなわち〈本来、組織の原点であり、組織をつくるものとしての自己〉の新生としてはじまるものである。一方、組織への不信・絶望が闘いの喪失を意味する結果としてあるという事実は、〈闘争のために組織は必要だ〉ということを、いぜんとして明らかにしている。

⑰ つまり、自己回復とは、自分と組織の関係――いうなれば、組織が〈人間関係〉をつくるのでなく、〈人間関係〉としての〈組織〉をつくること――での〈自己回復〉ということにほかならない。

言いかえればそれは、組織――それゆえ闘争――における共同性、または、〈人間変革〉の問題である。その視点から組織――闘争――をふりかえるとき、自己不在のそれは、ふたたび新しい意味をもって見えだしてくるであろう。

⑱ 〈共同性〉あるいは〈人間変革〉というとき、それらは、いままでの学園闘争や、その他の動きのなかに、萌芽としてさまざまなかたちで見い出すことができる。

たとえば、バリケードのなかでの籠城や、砂川青年の家、反戦ざん壕、バルチザン五人組や労働共同団、各地の団結小屋などで部分的または瞬時的にあらわれた〈生活日常〉のなかに、である。

それらは、外的な闘争の必要に触発されながら、それゆえほとんど無自覚ではあったが、ある意味で〈闘争のための共同体〉をつくりだす方向において、ひとしく――自己の内なるもの――との関係と変革を追求していたのであった。

⑲ 共同体が昨日までの政治闘争急進主義にとってかわり、いま一種の合言葉となって若者たちにむかえられたのは理由のないことではない。

だが、又それは〈負の空洞〉を埋めるものとして、ともかく停滞からぬけだすもの以上のものにしかなっていない。それはいま私たちが求めている、巨大な政治権力との闘争力となりえていない。というのが今日的状況のすがたである。

⑳ そしてこのことだけでも明らかなように、現代の〈闘争〉と〈組織〉と〈自分〉に関する切実な焦点は、具体的には〈共同体〉あるいはその〈生活日常〉のなかにある、といえるだろう。

また、関係の連合性としてとらえられる――従来の組織概念を超えるためあたらしい理念としての〈自由連合〉組織の問題なのである。

■2 今日における共同体の意味

㉑ 月刊紙〈自由連合〉は七〇年一月（十二号）に、〈今日における共同体の意味――いまここで、気付くこと〉という文章をのせた。また、同年五月（十六号）〈共同性の創出と自治管理〉、同七月（十八号）〈新しい関係

の創出へ〉そして七一年六月（二十九号〈再び、ここで気付くこと――内なる共同体〉、同八月（三十一号）〈共同体と直接行動〉と、共同体について何度か論じてきた。

これらは、ほとんど日本の反体制運動が視野に入れていなかった〈共同体〉の意味を、当時の状況に即していちはやく提示し、闘争を――それゆえに自分をも見失っていた人々に――これからの方向をさし示す役割を果したものであった。

㉒ また七〇年六月刊〈現代暴力論ノート――非暴力直接行動とは何か――〉では、〈共同体への視点〉で、その内容を次のように補完しようとした。

『私たちのまわりの状況が――きわめて学生たちとセクトの政治的闘争に左右されている現象のなかで――見のがされ見失っているさまざまな闘いのかたちと分野を、新鮮な眼で見直さねばならない。たとえばその重要な視点として〈共同体運動〉がある』

『学生たちは、非日常的な閃光的闘争をとおして、革命的基盤を一挙につくろうとするものであり、その焦点として政治権力との闘いが何よりも追求されてきた。一方、数世紀にわたって生起し、いまも行われている共同体のこころみは〈日常生活のレベルで、権力に対置する非暴力の生活空間をつくろうとするもの〉と言えるだろう。』

㉓ 『その意味で共同体運動は、革命を政治の分野だけに焦点化するのでなく、社会変革として日常生活のレベルにすえるものであり、革命の連続的日常化、日常生活の革命運動化、革命の土着化を意味するものである。なぜならば、

第一に、資本の論理を根底的にくつがえす〈私有財産制〉の実践的否定――たとえば〈商品化された労働〉に対しての〈非金銭的労働〉。

第二に、権力の暴力体制としての社会管理に対して、非暴力直接行動としての自治管理。

第三に、体制の集中性、統一性に対して、共同体の分権性、自由連合性。

第四に、体制社会の〈公共の福祉〉的倫理に対して、共同体の日常営為のなかの生活方法。生活技術としてあらわれる〈自己変革〉

第五に、分業され管理された疎外労働による生産に対して、自己の全的行為としての創造……

このように共同体は、体制内社会のなかでの〈異物〉であり、〈毒性を発揮する細胞〉として、すなわち本質的に、反権力闘争の〈内的拠点〉たりうるものなのである……』

㉔ 『しかし一般的に共同体は、いわゆる革命運動とまったくかかわりなく存在しているという事実がある。そして双方が、共に同じ地平を見わたしているにもかかわらず、その視線は重なることがない。その理由は、

㋑ 共同体が実践をとおして内実をつくろうとするものであるため、日常生活次元の小問題に追いまくられ、微視的小状況主義、生活至上主義におちいっている。巨視的な――すなわち見えない周囲の大きな状況と共同体との関係が視界から取りのこされている。

㋺ 〈資本と労働〉という、たとえば体制維持の共存関係の日常を拒否する、ということが、共同体への脱出――脱体制という、一方的個人的感覚で行われる。ひとりよがりの断絶でしかない。しかも資本はいぜんとして代わりの労働力を他から補完しえているという問題を放棄している。

㋩ 共同体が体制社会内での異物であり、毒性をもつ細胞であるというとき、当然権力は、毒性が強ければ強いだけ容赦しないだろう。その攻撃を防ぎ、存続と維持をはかるため、とくに創設期においては〈脱体制〉的たらざるをえず、外部との接触の窓口も最少に

限定するようになる。

その〈脱体制〉的志向は、ほとんど〈脱社会的閉鎖性〉に転化し、〈孤立的な自己完結〉をもってよしとするようになる。

㋥ 共同体の管理・運営の成否、つまりその成功や失敗は、ほとんどその成員自身の自己革命の意識如何にかかわっている。

言いかえれば、その内部の人的構成内容と何よりも人間関係の問題としてあらわれる。

それが生活の技術・方法として訓練されるのではなく――つまりいつも個人内面の変革、まず精神革命から……ということになる。

それはいぜんとして外部に存在している権力社会との関係――闘争を第二義的なものとするし、それゆえ〈社会革命の放棄〉である。

㋭ 共同体事業が、既往の現実として〈社会福祉〉とむすびつき、一部で混淆しているという傾向がある。

それは、権力の攻撃からの、かくれみのとして有効である以上に〈体制内矛盾の補完物〉として、保護？ をうけることになる。つまり、権力にとって、〈施設〉はゴミ箱のように、必要なものであるとき、その維持運営をみずから買って出て、奉仕労働する者たちに、補助金のヒモをつけることである。しかも、経済的安上りこの上もない低賃金でよいということは、まさに一石二鳥の策にほかならない。一方共同体にとっては、苦しい経済的基盤を、最低限確保できるということにおいて、それは結果として癒着し、体制内にとりかこまれてしまうのである。

㋬ このようなことにまして、共同体がどのようにあがいても、しょせんは体制内のワクを脱出できず、それ自体、亜共同体あるいは疑似的でしかない、という現実がある。

たとえばどのように外部との関係を絶ったかたちで共同体を運営しようとも、それの基盤としてある経済行為は外部との関係をまぬがれえない。共同体の存廃にかかわる〈経済的自立〉とは実は資本主義経済下での自立でしかないのである。

この問題をぬきにし、あえて忘れ去って、ただ共同体内部の完全を求めるという姿勢が、共同体運動をいつまでも、一部特殊な人種の――それゆえ一般社会と無縁な――別世界のものとしているのである。

㉕ 『このように共同体の現実は、権力にとって何ら毒性をもつ異物的存在でなく、しかも〈運動〉としての姿勢をほとんど欠除しているにもかかわらず、なお、〈いま共同体に新しい視点を与えよう〉とするのは何故か。

それは、学園バリケード封鎖や職場占拠・籠城などにおいて示された、当初の創造と活気にあふれた生活がつくり出す共同性が、その時間的経過とともに、頽廃・弛緩・停滞としてあらわれてくる内部問題――それこそが闘争の挫折・敗北に深くかかわっているからである。』

㉖ 『すなわちいま、十・十一月決戦においてすべてを、それゆえ闘争を見失った人々にとって、あらためて内的課題として〈闘争の日常化・そして生活性〉――また誤解をおそれず言えば〈闘争の私化〉――の問題が出てこなければならない。

一方それと照応して、既往の共同体の側からは、いままで外在的であった闘争を自らのものとし、その内部に見出すという作業が、何よりも必要とされている。

これを短絡的に要約すれば、「闘争のなかに共同体を」「共同体のなかから闘争へ」ということになるだろう。』

㉗ 『言うならば、共同体は〈闘争共同体〉あるいは〈武器としての共同体〉としてあることによって、共同体の意味を体制内で持ちうるのである。

そして〈闘争と組織と自己〉という、きわめて現代的課題を、関係の共同性――自由連合の思想の、具体的実践と展開によって、真にこたえうるものたりうるのである』

『㊟たとえば釜ヶ崎・山谷などでの小事件がたちまち〈うちこわし〉的暴動へとひろがるという現代的状況がある。それを自然発生的な一時のものとしてとじこめないためにも、当然活動家の日常的なうごきが行われていなくてはならない。つまり暴力手配師にかわる〈自立した自分らの手配組織〉あるいは〈組み組織〉などをつくる活動がそれである。

その日常活動の前提となり、基礎となるのは、まずそこに〈土着〉し〈生活〉することであり、その意識的人々がつくる〈共同体〉である。また、それを支援する〈共同体志向の運動〉や、〈ワークキャンプ〉などによって、市民社会とそこを往復するグループや、諸運動団体の〈連合〉であり、その〈連合組織〉である。

そして〈共同体〉はこの場合、それらの根拠地として、さらに大衆をより多く吸収し拡大する生活の場として、強力な細胞となることは言うまでもない。』

■3 〈論理〉の不在と流行

このようにして〈共同体〉を、若者たちはあたかも忘れていた故郷のように、その視野の中に見出した。

またその傾向をいちはやくとらえたジャーナリズムが、めずらしいもののようにヤマギシカイを紹介するなどということによって、さらに拍車をかけ、一種の流行化した。

一方、アメリカから伝えられてきたヒッピー化、脱社会的な放浪、自然への回帰などの風潮は、闘争も学校も放棄してルンプロ化した若者たちの心情のなかにひろがり、共同体はその一部の人たちが吸収するところともなった。

㉙ ヤマギシカイ・心境農産・大倭あじさい邑（交流の家）あるいは一燈園や新しき村などが注目され、そこに定着しないまでも、訪問し、数ヶ月あるいは数十日とどまって働いたり、つぎつぎ移っていった経験をもつ若者の数は、おそらくこの二・三年間に数千に及ぶであろう。また、都市の小さなアパートの一隅で、あるいは一軒の家を借りて、生活を共同体意識のもとにやり出したグループの数も、おそらく全国数百に及ぶだろう。（このような状況で日本協同体協会が果した〈運動〉のなかの役割は、注目すべきである）

ところで、それらに共通してみられる留意すべき現象がある。

それらは、ともかくまず〈共同生活〉を実践し、そこを解放空間として、自分が自由に生活する点で、同じ志向をもっているにもかかわらず、ほとんど相互に関係がなく、具体的な交流がない。

それは、共通して彼らに〈共同体〉についての明確な理論がなく、ただ心情のみで結ばれたせまい友人、知己、有志関係でつくられているからにほかならない。

つまり、共同体志向というきわめてあいまいな情緒は共通しても、追求するもの自体の論理的明晰性を欠いている。そのような理論――それゆえに理念――の不在が、また相互交流欠除の現象となってあらわれているのである。

㉚ さらに、さきにあげたヤマギシカイなど既存の――ある程度経済的基盤（資本）をもつ集団は、それぞれの立場と方針をもつ経営体である。そしてそれ自体としての立場や方針のみを表現するが、理念としての共同体を名乗ることがない。また自覚的にそれとして

存在を明らかにしようとすることもない。

たとえばヤマギシカイは、ヤマギシズムZ革命をかたっても、共同体としてのそれ自体から語るのではない。かくしてそれらの集団は、創設者を中心にしたそれぞれの理念と立場をもつことにおいて互いに相違する。そして、共通する〈共同体としての論理〉は意識の外にある。

つまり、〈集団生活の共同性をあらわす形態〉において相似している点で、彼らは一様に〈共同体〉とよばれているだけである。

とすれば、共同体とは単に〈生活形態の一カテゴリー〉にしかすぎない。そしてたまたま、外側から呼ばれたからそうだという、逆の認識から、共同体が意識されるという転倒がある。

つまりそれ自身としての内的必要性を欠いていたゆえに〈共同体の論理〉の不在があった。その不在が、相互間の親近感や交流そして提携を、長いあいだ気付かさずにおいたのである。

また、このような共同体自体としての意識のあいまいさ――外在性、というよりも論理の不明確さ――非内在性は、それが反権力的存在としてあるという共同体の何よりの特質をあいまいにし、そこに本来的に存在する反体制的立場を風化するままにした、とも言えるだろう。

㉛ 一方、共同体がその人間性に依拠して、論理そのものをとくに求めない一面には、それ自体の日常が、論理では割りきれないということがあり、また実践や経験が尊重されるとともに、行為としてあらわれる人間の鍛錬という倫理的な精神主義が、それを代行していることにもよっている。

だがその人間主義的精神性は、挫折した闘争がきわめて硬直した人間不在の論理主義であったことの反動として、若者にとっては、むしろ新鮮なものであったかもしれない。

「そこに何か未知の新しいもの、いままで知らなかった人間の世界がある！」

そして彼らにとって、共同体が一たん憧憬となってしまったとき、もうそれだけで、共同体の意味は充分であったであろう。

それゆえ、彼らが自らの手でやりだした共同体づくりもまた、すでにモデルとしてある〈形態としての共同体〉を乗り超えることなく、ただ心情的なものの追求として、論理不在のまま実践される以外になかったのである。

■4 闘争共同体の意味

㉜ このような〈共同体〉の現状に対して、第三章のようにとつぜん〈闘争共同体〉へと主張することで、そのまま共同体がかわっていくとは考えられない。のみならず多分に共同体関係者に、この〈闘争〉という言葉は、ひんしゅくを買うにちがいない。

それは、〈闘争〉の意味が、多くの人々に、ただ国家権力との政治的戦闘だけに、きわめて狭く限定して通用していることと、関連している。

〈闘争共同体〉というそれは、まず体制内共同体としての存在意味を明らかにするものであって、いわゆる闘争をそのまま共同体に短絡するということでは決してない。

共同体を単に闘争方法として、武器化してとらえるだけならば、それは軍隊そのものとかわりないであろう。そこには必ず強権が必要であり、抑圧と強制がある。それはまさに自分が捨て去ったものに再び戻ることであり、共同体そのものの意味の抹殺ではないか。

革命は、いうまでもなく自己の内外の全変革である。もっともはっきりと感受され、眼にみえるものが権力支配の暴力――政治――

であるとしても、それとの闘いが革命運動のすべてではありえない。

〈共同体〉運動は、いわゆるセクト集団などの政治闘争に対して、傍観者的あるいは日和見主義であるとして、しばしば攻撃されている。だがそれは――セクトが最終的に権力奪取をめざす〈権力集団〉であり、その原理と展望に立っている運動体であるのに反して、――共同体が全く異った原理と展望をもつ運動体だ、ということにおいて見当はずれと言わねばならない。

とすれば、〈闘争共同体〉というとき、その闘争は、今までの闘争のやり方の継承・持続ではなく、あたらしい闘争の方法を意味していることは明らかだろう。

そしてこのことを自覚しないかぎり、闘争共同体は、結局セクトの闘争に追随し、補完し、利用される以外のものでしかないのである。

㉝ 共同体は、〈日常生活のレベルで権力と対峙して、非権力としての――自分たちの生活と空間を創り出す――社会運動――である〉とは、さきにのべた。

〈日常生活のレベル〉とは、革命運動を、微視的な身辺生活日常のなかにおくということである。自己の生活革命であることによって、〈政治的日常〉に対峙することである。

〈政治的日常〉とは言うまでもなく、市民社会秩序としてある――〈疑似非暴力的な日常〉のことである。〈国家の人民支配は、日常において非暴力的仮装を完璧することで貫徹される。それは単に人民に〈暴力政治を意識させない〉だけでなく、みちがえるような質的転換による変貌をとげてあらわれる。すなわち民主主義法治国として、人民が承認し、合意し、参加する仕組みによる合法的な秩序維持――疑似非暴力体制である〉

〈政治的日常〉に対峙するとは、このような疑似非暴力体制社会の市民的秩序に対して、共同体秩序としての真の非暴力的日常――を対置しようとすることである。

だが〈共同体的秩序〉――その日常は、〈疑似非暴力的日常との、根底的な闘い――なくしては実現しないものである。私たちは生まれたときから、すでにどっぷりと市民的日常の中につかっており、その秩序のなかで生活意識さえ操作されるものとなっている。

とすれば〈非権力としての生活空間――共同体〉は、反権力的生活としての日常闘争のなかから、はじめて生まれてくるものである。

㉞ 〈日常生活のレベルで〉ということの実践的な第一歩は、このようにして〈反権力的生活日常〉を〈闘争〉をとおしてつくりだすことである。

その〈闘争〉とは〈日常生活次元の諸行動と方法が新しい視点によって、きわめて些少な部分から組みかえられること。――生活身辺の微視的な状況を技術的・事務的変革によってとらえなおし、つくり直すこと〉である。

そしてその新しい視点、あるいは技術的事務的変革とは〈非暴力直接行動〉にほかならない。

■5 非暴力直接行動

㉟ 〈非暴力直接行動〉というとき、私たちは〈非暴力〉のみをまず強く印象する傾向がある。すくなくとも〈非暴力行動〉と同義化してしまう。このように〈非暴力〉がそれのみで、また〈直接行動〉がそれだけとして、切離した印象で受けとられているとき、それは本来の性質を失って形骸化したものなのである。

事実いま私たちは、そのように二分されたものとして非暴力と直接行動をうけとっており、真の〈非暴力直接行動〉をしっていない。

本来その二つは不可分のものであり、それ故にこそはじめて権力との闘いの意味をもつ、ということをまず明らかにする必要がある。

㊱ さて直接行動というとき、私たちは〈暴力に訴える実力行使〉のことをおもいうかべ、〈暴力の同義語〉としてうけとる。

だが辞書をひいてみると、〈直接〉とは〈あいだに何もはさまず接すること。他のものを通さず、じかなこと〉とある。すなわち〈直接行動〉とは〈他のものをとおさず、自分でじかに、求めるものを手に入れる行動〉である。

さらに言えば、〈私たちの日常生活で必要とするものを、じかに自分の労働で入手すること〉である。

問題をより単純に具体化すると、〈日常生活で必要とするもの〉というときの〈もの〉とは、まず〈衣食〉に代表される〈生活物資〉であり、その生産手段としての〈道具〉である。〈それを入手する〉とは、まぎれもなく、〈生産すること〉であり、〈労働〉そのものにほかならない。

つまり直接行動の本質は、まず何よりも〈生産行動〉そのものである。そしてまた、生産と同様の意味での〈創造活動〉である。私たちの日常生活に深くむすびついた、いわば生活文化の創造である。

そして――権力がどのように巨大な暴力を以てしてもなしえない――人民自身の、〈非暴力のちから〉であるとともに、社会を変革するものなのである。

㊲ このようにみるとき、〈直接行動〉すなわち〈生産〉や〈創造〉は、まぎれもなく〈非暴力社会〉に基盤をおいて成立することがわかる。

たとえば私たちが戦場のなかに投げこまれ、その日常を暴力が支配しているとき、そこに真の生産活動や創造行為は存在しえないだろう。

つまり本来的に〈生産のための労働〉を妨げるものが暴力であることによって、直接行動は、まさにそれと対立するとともに、非暴力とわかちがたく結びつくことで存在しうるものなのである。

㊳ この――直接行動は〈非暴力〉とわかちがたく結びついている――あるいは、非暴力のちからは〈直接行動〉によってのみあらわしうる――ということは、いま私たちが問題にしている共同体の切実な題題――〈生産労働〉が維持継続され、私たちの必要なものが〈生産〉されるためには、何よりも〈非暴力日常〉が存在しなければならない。すなわちその日常をおびやかす〈暴力〉と闘うことをふくめて、直接行動は非暴力と結びつかずしては、疑似的にしかありえない。

第二に、直接行動が自己のための、自らの労働であるということは、〈非暴力〉の社会的展開である〈自治管理〉〈自己管理といってもよい〉と密接に関連している。

すなわち、生産物を自らの手で収穫し、処理すること。それを配給使用するために、みずからが管理し運営すること――が自治管理である。そしてこれこそ〈共同体〉が第一義的にまず行なおうとしていることではないか。

㊴ 他方、私たちがそれと思いこんでいる生産労働は、労働力を商品として資本に売ることであり、直接行動としてのそれではない。

またそのようにして得た賃金を仲介にしてしか、自分の生産品を手に入れえないことにおいて、〈自治管理〉しえないものとなっている。

すなわちそのような〈生産労働〉は、疑似生産労働であり、〈疑似直接行動〉にほかならない。そして、その疑似化を私たちに強制しているものは、資本主義であり、巨大な暴

力機構として私有財産制をまもる国家権力である。

このように全てを体制内に搦めとられた情況で、〈非暴力直接行動〉の闘いは、当然、疑似生産労働の拒否、直接行動の回復・奪還・自治管理への闘いとしてはじまらねばならぬことは言うまでもないだろう。

㊵ このことはまた、きわめて現代史的な課題――はじめにあげた三つの変革の要因――とも密接にむすびつく。すなわち〈人間の回復〉としての、軍需生産や公害企業での労働拒否、労働疎外や差別労働の解消を具体化することによって――。そしてさらに言えば、これらのことを論理とした〈共同体〉の未来像こそが、組織した実践の推進力となり、新しい社会の細胞となりうるのである。

このようにみるとき、いままで殆どあいまいで不明確だった〈共同体の理念〉は、まさに〈非暴力直接行動〉のうちに求められねばならないことが明らかであろう。

そして共同体における〈闘争〉の意味は、この〈非暴力直接行動〉の積極的意識化とその実践のうちに示される。

それはまさに〈闘争〉の意味の質的転換であるとともに、闘争のやり方の変革であることは言うまでもない。

㊶ 現時点で、いままざまなところに存在し、またあらたに生れようとしている共同体が、とりあえず意欲的にすすめねばならないことを、やや思いつき的にのべるならば、次のことである。

第一に、〈非暴力直接行動〉を自らの理念として、積極的に把握すること。

第二に、それぞれの営為を、相互に関連させ、補完しあうための〈自由連合〉を形成すること。

たとえば、すべての共同体間の連絡経路として、それぞれの生産品を交流する――物流システム――が考えられねばならない。（そのように機械的な限定した部分での交流が〈自由連合〉である。）

またたとえば、政府専売品の不買と、そこからでてくるものとしての『直接行動』の合法・非合法を問わぬ実行である。また……。

もっとも、権力が自己の威信や存在にかかわる事態に当面するとき、必ず弾圧をかけてくるだろう。

とすれば、とうぜん戦略戦術の問題として、共同体のそれぞれは、さまざまな方法をもって連合しつつ、自分を守らねばならない。

㊷ とすれば共同体は、その規模、性質によって、また戦略戦術としても顕示的なものと地下的なもの、あるいは見えた存在と見えない部分とで、活動が行われるべきだろう。

またある種のものは、一地区に定着するのではなく、常時移動し変化するゲリラの如きものや、〈見えない共同体〉――内なる共同体として、ただ共同体の質をもつ、形成未然のすがたをとることもあるだろう。（これはまた、戦前の社会主義団体が弾圧の中でやりとおしてきたことであった。）

事実、共同体を一定の固定したイメージで考える必要はない。それはまた〈人間関係と機能〉を表現するものだからである。

ものにピンからキリまであるように、共同体は、いま生まれようとするものから、数十年の歴史と基盤をもつものがある。成員の構成も、年令、性別、能力や経験、その思想においてさまざまであり、その集合体としての共同体それぞれの方向と固有の性格をつくり出している。

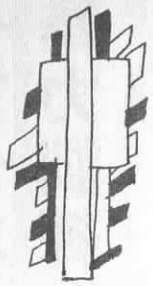
その意味では、権力と妥協的姿勢をとる共同体から、地下に潜って非合法闘争を進めるもの、あるいは〈なまけ者共同体〉や〈どろぼう共同体〉があっても差支えない。

それらは個別に自立しているとともに、共同体総体として――その基底としてあるのは共同体原理としての〈非暴力直接行動〉である――見える部分見えない部分で相互に補完しあうこと、つまり各共同体の機能において〈連合〉することである。

さらに言えば、〈連合〉が、他を制約し縛るものとしてでなく、それぞれの自立――それゆえの相違を前提として、互いにその空隙をうめる役割――機能――において結ぶとき、それこそが〈自由連合〉であり、あたらしい社会のつくり方、すすめ方にほかならない。

それはまた、そのままで市民のなかへ波及していく、変革のちからでもある。

（本稿は次につづく、〈家〉と〈共同体〉を加えて一篇となるものである）



共同体研究会報告

●野本三吉「日本人と神道」
●若宮章嗣「生活の創造と私の体験」

最近の共同体研究会は、狭い協会の事務所の床に三〇人ばかりの参加者がびっしり座りこんでおこなわれている。何故こんなに集まるのか、とまどうぐらいである。

9月13日の研究会では、野本三吉氏が「日本人と神道」というテーマで報告した。「地球の運命は有限であり、近く大きな変化があるのではないか」と彼は予言めいて話しはじめた。彼は、いわゆる「研究発表」するのではなく、どんどん彼自身の世界を展開してゆく。――「一人一人がやむにやまれずにやってしまったことが、神にかなうことではないか」「共に生かし合い、他人の存在を自分に重ね合わせられ、自他が一つの生命に結ばれてしまっているような母性我の世界を考える……」「理念として共同体をつくろうというのではなく、本物に戻りたいという止むにやまれぬところから出てくるものこそ……」

彼の話を聞いていると、彼が予感している世界への道がすぐ目の前にあるような気がするから不思議である。「日本人と神道」に関しては、別に書いてもらう予定だ。

10月18日には、生活創造協会の若宮章嗣氏が「生活の創造と私の体験」というテーマで話してくれた。氏は現在、東京で生活道場的なものを指導している。

はじめに彼は参加者を見まわして「ここにいる人たちは目がきれいだが、どこか弱さが感じられる」と切り出した。そして、彼自身の今までの生き方をふり返りながら、「ギリギリの生活の中から強い意志が養われ、〝本物〟が生まれてくるのではないか」と語った。真理を外側にではなく自分の内側に命がけで求めてゆけば、我々を根本のところで生かしている〝命の流れ〟がつかめるというのだ。そして、何よりも見栄や体裁を捨てた〝ありのまま〟になることが大切だという。

五八年を必死に生き抜いてきた人の〝命の流れ〟の一端にふれたような気がした。